

控物捕次平形銭

政お唄小

堂胡村野

庫文空青

一

「八、たいそう手前^{てめえ}は粹になつたな」

「からかつちやいけません、親分」

八五郎のガラツ八は、あわてて、膝^{ひざ}つ小僧を隠しました。柄にない狭い単衣^{ひとえ}、尻をまくるには便利ですが、真面目に坐り直すと、帆^{ほった}立て尻^{じり}にならなければ、どう工面をしても膝^{ひざ}つ小僧がハミ出します。

「隠すな、八、ネタはちゃんと拳がつてるぜ」

銭形平次は構わずに続けました。

「ヘッ、ヘッ、どの口のネタで？」

「いやな野郎だな、顎^{あご}なんか撫^なでて、——近頃手前、遠吠えの稽^け古^{いこ}をするってえ話じゃないか」

「遠吠えは情けねえ。誰がそんな事を親分に言い付けたんで」

ガラツ八は少しばかり意気込みました。

「手前の伯母さんだよ。——今朝お勝手口へ顔を出して、お静に愚痴を聞かせていたぜ——酒や女の道楽と違って、若い者の稽古所入りが悪いではありませんが、家へ帰って来て唸^{うな}られると気が滅入ります。糠味^{ぬかみそ}噌^そは蓋^{ふた}に仔細^{しさい}はございませんが、あんな調子つ外れの遠吠えを聞かされたら、どんな気の強い娘も寄り付かないだろうと思うと、可哀想でなりません。御存じの通り、あれはま

だ独り者ですから——だとき。どうだい八、伯母さんは苦勞人だろう。あんまり心配さしちやならねえよ」

「チエツ、^{はばか}憚りながら娘つ子^よ除けの^{まじない}禁呪に小唄をやっているんだ。心配して貰いたくねえ」

ガラツ八はそう言いながらも、耳の後ろをポリポリ搔いております。

「そうだろうとも、だから俺は言つてやつてよ。——伯母さんの若い時と違つて、この節はあんなのが^{はや}流行るんだ——てね、小唄一つ歌うんだつて、鼻っ先や^{のど}喉で転がすんじやねえ。八の野郎は胆つ玉で歌うに^{ちげ}違えねえ。——」

銭形平次に悪気があるわけではなかったのですが、伯母の^{こうふん}口吻

から察して、ガラッ八の八五郎が小唄の師匠に気がありそうにも取れたので、それとはなしに脈を引いて、意見をするものなら、今のうちに意見をしようと思ったのです。

「親分、本当のことを言うと、こいつにはワケがありますよ」

「そうだろうとも。二日も行かなきゃ、師匠の小唄お政まさが、迎えをよこすほどだつて言うから、ワケだつて大ありだろうよ」

「嫌だね。伯母さんが、そんな事までブチまけたんですかい」

「人に意見などをする歳じゃねえが、小唄お政しよくじゃお職しよくすぎる。

止よす方が無事だぜ、八」

錢形平次は漸ようやく真顔を取戻しました。からかったり、ふざけたり、叱ったりするうちにも、子分の八五郎を思う真情が、行き渡

らぬ限くまなき心持だったのです。もつとも、親分子分といつても、歳からいえば、幾つも違わない二人です。時々真剣さが顔を出してくれなければ、際限もなく洒落しやれのめして、隔ても見境もなくなりそうな仲でもあったのでした。

「それは心得ていますよ、親分。芝居小唄の千せん之介のすけ、六郎兵衛はともかく、江戸じや、お寿ひさとお政は女師匠の両大関だ。吉原から浅草一円、柳橋へかけての弟子だけでも、千人はなずつはあると言われるお政が、下っ引のあつしなんかには、洩はなも引っかける道理はありませんがね」

八五郎の話は妙に筋が通ります。

「……………」

平次はうさんな顔を挙げました。伯母から聞くと、馬道のお政の稽古所へ、日参しているほど取上とりのぼ気せた八五郎に、こんな分別があるとは思われなかったのです。

「仔細あつて命が危ない、——お願いだから、毎日来てくれ——」
 って言うんで、まさか十手を懷ふところ中に突つ張らかして稽古所を見張つてゐるわけにはいかねえ。親分の前だが、この八五郎も馬鹿になつたつもりで、毎日馬道に通つちや、精一杯のドラ声を張り上げてゐるんですぜ、ヘッ」

八五郎はこう言つて変なところに苦笑を漏らしました。こうは言い切つたものの、少しは後ろめたさもあつたのでしょう。

「そうかい、そいつは知らなかった。お政の顔を見ながら間の抜

けた小唄なんか唸^{うな}つて、実は大望^{たいもう}があつたわけだね。いや、恐れ入ったよ、八」

「親分、まだ、そんな事を」

「だから、その大望を聞こうじゃないか。江戸二人師匠と言われた小唄お政が、命にかかわるほど思い詰めたなら、さぞ口舌^{くぜつ}にも節が付くだろう」

平次はまだ本気にはなり切っていない様子です。

「だがね親分、お政が二度も殺されかけているんですぜ」

「何だと？」

話はそれでも、次第に軌道に乗って行きます。

二

その頃は隆達小唄や、平九節小唄の勃興期で、江戸にも
 漸く名人と言われた、女師匠が現われるようになっていました。
 ようや

山谷のお寿と、馬道のお政は、その中でも有名で、どちらも若
 さんや

く、どちらも美しく、芸妓、素人の隔てなく、男弟子も、女
 げいしや しろうと

弟子も取って、多勢の狼連と、少数の有力な旦那衆に取巻か
 おおかみれん パトロン

れ、少なくとも表面だけは、派手で陽気で、この上もなく結構な
 暮しをしているのでした。

二人の間には、自然に競争が起りました。同じ芸道にいそしむ
 よそめ
 仲で、他所眼には、至極打ち解けて見えました。腹の中では鎬
 しのぎ

を削り合つて、一人でも弟子を多くし、少しでも評判をよくしようといった、両雄並び立たぬ心持でいたに相違ありません。

その間の消息を八五郎はこう説明するのです。

「お政は打ち明けてお寿のせいとは言やしません、去年の暮には、大さらいの晩、危うく水銀を吞まされるところを、弟子の浜名屋又次郎さんに助けられ、今年の夏は涼み船から突き落されたのを、船頭に引上げられたと言いますぜ」

「なるほど、そいつは物騒だ。——それで、用心棒の代りに手前てめえを呼んで、伯母さん困らせな小唄を仕込んでいると言ったわけか」
「早く言えばそうなんで」

「気取つて遅くなんか言うから解らなくなるじゃないか」

平次もここまで聞かされると、江戸名物の小唄お政の命が心配になります。

「親分、お政は可哀想じゃありませんか。こうしているうちにも、どこから、どんな術で相手が来るか毎日ビクビクもので暮していますよ」

「お政の命を狙うのは——まさか、お寿じゃあるまい」

平次はまだこんな事を言うのでした。

若くて美しく、ともすれば、先輩のお政の人気を奪いそうにするお寿は当面の仮想敵には相違ありませんが、この市井しせいの芸術家お寿の、なよなよとした夕顔のような淋しい美しさと気品のある芸を知っているだけに、平次も急には疑う気にならなかったの

です。

「大さらいの時は、お政とお寿が一緒でしたよ。お政が一とくさ
り歌って、薄暗い楽屋へ帰って、湯呑の湯を吞もうとすると、そ
こに居た浜名屋の次男坊の又次郎が、師匠の手を押えて止めたそ
うです。——その湯は変だから、止よす方がいいって——」

「……………」

「縁側へ持つて行つて見ると、中にはギラギラと水銀が沈んでい
るんだそうじゃありませんか。懐中鏡の裏の紙を剥はがして、その
水銀を湯呑へ入れたに違いありません。ところでギヤマンの和オラン
蘭ダかがみ鏡を持つている者は、そこにはたった二人しか居なかつた
と言います。一人はお政で、一人はお寿——お政は自分の湯呑へ

自分の鏡の水銀を入れるはずはありません」

「……………」

平次は大きくうなずきました。

硝子製ガラスの鏡は非常に珍しい時代ですから、水銀の貼り方も至つ

て粗末で今日のようにエナメルで固めたものでなく、鏡の裏へ紙に延して当て、わずかに枠で押えたものだったのです。水銀を呑めば、声が潰つぶれると一般に信じた時代、小唄の師匠に致命的な打撃を与えるためには、そんな事をする者もあつたのでしよう。

「大さらいの場所は？」

「山谷きよまつの清松の二階を打ぶつこ抜いたそうですよ」

「それから、涼み船の一件は？」

平次の探求慾は活潑に働き始めました。

「この時もお寿と一緒にで、——お蔵前の山口屋が、二人を伴^つれて柳橋から船を出しました。両国の下へ舫^{もや}つて、歌う、飲む、踊るの大騒ぎです」

「手前も一緒にかい」

「とんでもない。岡つ引きが一緒だった日にや灘^{なだ}の生^き一本^{いっぽん}が、大川の水みたいになる」

「たいそう物事に遠慮するんだね」

「とにかく、さんざん騒いだ揚句無理強い酒が廻^{まわ}つて苦しくてたまらないから、お寿を誘^よつて、お政は舳^{みよし}へ出たそうです」

「お政の方が誘^よつたんだね」

「おかしいのはそこだけです、誘われたお寿がはつきり言うんだから嘘じゃないでしょう。お政は何とも言いません、が、舳で風に吹かれているうちに、川へ落っこつた事だけは確かで」

「落っこつたのか、お政が？」

「それもお寿の言い草で、——たぶん酔った顔を風に吹かれて目が廻ったんだろう。お政さんはフラフラツとすると、真つ黒な水の中へ落ちた——とこうなんだそうですよ。もつとも、お政に言わせると、呑んだと言っても、川へ落ちるほど酔ってはいなかった。好^いい心持で夜風に吹かれていると、いきなり後ろからドンと突かれたような気がする——とこうです」

「そこにはお寿とお政の外には誰も居なかったのかい」

「山口屋と取巻きの連中は屋根の中で、お爛番かんばんと船頭ともは艫ともでさ」
「なるほどな」

「お寿はあんまりびつくりして声も出なかった。ア、ア、と言ううちに、五六間流されたお政が、幸い通り掛った他の涼み船の船頭に引上げられて、さんざん水は呑んだが、命だけは助かったそうですよ」

「それは危ないな、お政は水心がなかったのか」

「小唄の師匠が泳ぎを知っているわけはありません。もつとも、突き落されると、前もつ以て解つていれば、泳ぎの稽古ぐらいはしたかも知れませんが——」

「皮肉を言うな、八」

「ところで親分、これがあべこべだと話になりませんよ。お寿はつくだ佃で育つて、あんな華奢きやしやに見えるくせに、泳ぎは河童かっぱの雌ほどうまいそうですよ」

「河童に雌があるのかい」

「雄がありや雌だつてありますよ」

無駄は入りますが、ガラツ八の話は次第に面白くなります。

「それから、八五郎さんの弟子入りとなつて、一日顔を見せなきやア、呼出しが来るというわけか」

「ヘッ」

「満まんざら更じゃねえな、八。小唄お政に呼出しをかけられるのは、一千人という弟子の中でも、手前一人だろう」

「まだありますよ」

「誰だ」

「浜名屋の冷飯食いで——」

「又次郎か」

「それから山口屋の旦那」

「たいそう気が多いんだな、それがお政の情夫と旦那か」

「だからあつしなんか、本当の用心棒で」

「気が弱いじゃないか、——今日もこれから行くんだろう」

「ヘッ、行かなきゃア、また呼出した」

八五郎は少しばかり脂下やにさがりました。

「厭いやな野郎だな——まあいい、お政に逢ったら、そう言ってくれ。」

平次も弟子入りをしたいが、どうだろう、今日明日はいけないうが、
 明後日あたり行ってみるから——って」

「本当ですかい、親分、それは」

ガラツ八の鼻の下は長くなりました。

「誰が嘘を言うものか、放っておくと、大変な事が起りそうだ。

用事が一応片付いたら、きつと行つて、この平次が見張つてやる。
 口幅つたい言い草だが、大船に乗つたつもりで待っているように
 ——つて言うんだよ」

「驚いたな」

ガラツ八は呆氣あつけに取られました。大きな口を利くのを、馬鹿み
 たいに思っている平次が、こんな自惚うぬぼれ切つた事を言う真意が吞

込み兼ねたのです。

三

「大變ツ、親分」

ガラツ八は、翌^{あく}る日の晩、鉄砲玉のように飛込んで来ました。

「何が始まったんだ。相変らず騒々しい」

平次はそう言いながらも、充分期待していたらしい顔を挙げたのです。

「お政がやられましたよ、親分」

「引つ搔かれるか、髪でも^{むし}毛^{むし}られたんだろう」

「それどころじゃねえ、親分——あ苦しい、浅草からここまで駆け来てたら、物が言えねえ」

「馬鹿、それだけ口が立ちや沢山だ。早く言つてしまいな——まさかお政が殺されたんじやあるまいな」

「殺されましたよ」

「何だと」

「この眼で見えて来たんだ。間違いつこはねえ、もう三輪みのわの万七親分がやつて来て、お寿を調べていますぜ——あんなにお政に頼まれたのに、少しの油断でやられましたよ。三輪の親分に下手人を挙げられちゃ、この八五郎の男が立たねえ、親分、お願いだから行つてみて下さい」

八五郎はもう、錢形の袖を引いて、力ずくでも引張り出そうと
しているのです。

「三輪の兄^{あにき}哥の縄張だ。そいつは御免蒙ろうよ、八」

「親分、それじゃお政が可哀想だ。いえ、この八五郎が可哀想じやありませんか。あんなに頼まれたくせに、指をくわえて引つ込
んじゃ」

「よしよしお前には敵^{かな}わねえ。——とにかくちよいとだけでも覗
いておこう。この殺しは一風變つていそうだ」

何を考えたか平次は、思いの外気軽に支度をする、八五郎と
一緒に、浅草へ急ぎました。

「お政の家なら馬道じゃないか」

馬道を横に見て新鳥越しんとりごえの方へ行こうとするガラツ八を呼止めました。

「それが不思議なんで、——お政は昼過ぎから山谷のお寿のところへ行つて、珍しく油を売り、薄暗くなつてから、お寿に送られて新鳥越まで来て、正法寺しょうほうじの前で別れたんだそうですが、——これはお寿の言い分ですよ、親分」

「……………」

「その正法寺前の路地で、血だらけになつて死んでいたんです」

「誰が見付けたんだ」

「提灯ちようちんを持つて迎えに行つた権助ごんすけが、新鳥越の路地に人立

ちがあるんで、何の気もなしに覗いてみると、師匠のお政が殺さ

れているんだそうじやありませんか。町役人に届けて、あわてて帰ったので、馬道に居た弟子が二三人、宙を飛んで行ってみました」

「誰と誰だ」

「あつしと浜名屋の又次郎と、権助と、染物屋の勘次と、——そんなものでしたよ」

そんな話をしながら、平次とガラツ八が現場へ駆け付けた時はいい塩梅あんばいに検屍けんしが済まないもので、路地の死体もそのまま、番太おやしの老爺が立番をして、町内の野次馬が、怖い物見たさの遠巻きに、月の光にすかしております。

「筵むしろを取ってみな、八」

「へエ——」

死体に掛けた筵を取ると、番太は心得て提灯ちようちんを差出しました。

「あッ、これはひどい、——何という虐むごたらしい事をしたんだ」
平次が言つたのも無理はありません。

月の光に蒼あおずんだお政の死に顔は、全く思つてもみない痛々しいものだったのです。

なにぶんにも凄すさまじい血です。

晴着らしい単衣ひとえの胸から腰すおうまで蘇芳を浴びたようになって、左

顎の下へ、斜きめに開いた瘡口きずぐちは、それほど大きいものではありませんが、

漸ようやく脂の乗つて来た豊満な大年増の顔は、蠟ろうのように

蒼ざめて、月の光と、提灯のあかりの中に、言いようもない不思議なニュアンスを醸^{かも}し出してあります。

美女の死体の凄まじさに、平次もさすがに躊躇^{ためら}いましたが、しばらくすると、番太の提灯をガラツ八に差出させ、馴れた順序で、髪形から、着物の崩れ、手足の投げ出された方向から、血の流れよう、傷口の模様まで、恐ろしく念入りに調べ始めました。

「八、何か掴^{つか}んでいるようだ。左の手を開けてみな」

「へエ——」

八五郎はお政の死体の冷たい掌^てを開けました。

「ありましたよ、親分」

「何だ」

「毛」

「どれどれ」

ガラツ八のつまみ上げたのを見ると、紛れもなくそれは、女の髪
の毛です。懷紙を出して、その上へ置くと、長短不揃いなのが
三本、いずれも少し赤くて、縮れているのがはつきり判ります。

「お寿の毛ですよ、親分」

「判っているよ」

美女お寿は、類たぐいまれ稀な姿と顔形に恵まれながら、何の因果か

赤くて縮れた毛を持つていたので有名だったのです。

四

「刃物は？」

平次は四方^{あたり}を見廻しました。こんな場合、よつぽど落着いた悪党でないと、たいがい血だらけな刃物は捨てて行くものです。

「三輪の親分も捜しましたが、見当りませんよ」

番太の老爺^{おやじ}はそう言います。

「八、念入りに捜してみてください。下水の中でなきや、堀の中だ」
「よし来た」

八五郎は番太の提灯を借りると、いきなり下水の中へ首を突っ込みました。

「かき廻しちや何にもならない。下水を念入りに捜すのは明朝^{あした}の

事にして、塀の中を見るんだ」

「へエ——」

がしかし、それも無駄でした。

「八、あれは何だ」

しばらくすると、平次は月の光に白々と見える、右手の長屋の
 板いたびさし 庇の上を指しました。

「光るようですね、親分」

「梯子はしごを借りて見てくれ、雨が降ったはずはないし、——庇の上
 の光るのは変だ」

平次に言われるまでもありません。八五郎は気軽に梯子を借り
 出して、庇へ掛けると、筒抜けに驚きの声をあげます。

「親分、見付かりましたよ——血だらけの剃刀^{かみそり}」

「有難い、それで何もかも揃った」

柄^えに籐^{とう}を巻いた、使い古しの剃刀を受取ると、平次は雀躍^{こおど}りしたい心持になるのでした。

「親分、番所へ行ってみましょうか」

「待ってくれ、ここに居るなら、お政の弟子達に一通り会って行きたい」

「駆け付けた顔はたいがい揃っていますよ。権助どん」

「へエ——」

ガラツハの声に応じてノソリと出たのは、お政の使っている飯^め炊^{した}き、庭も掃けば使い走りもするといった、調法至極な男です。

見たところ五十幾つ、なりふり形振構わず小金を溜めるより外に望みのない人間で、信州の土の匂いのするといった風格には、お政を殺す動機などを持っていそうもありません。

「それから、又次郎さん」

「へエ——」

浜名屋の冷飯ひやめし食い、飛抜けた道楽者で、親兄弟も構い付けない代り、女の子の達引たてひきには不自由をしない男、二十七八の若いつばめがた燕型、これは一番疑われそうな人間です。

「師匠が殺された時分、どこに居なすつた」と平次。

「馬道に申刻みなつ（午後四時）時分から先刻さつきまで、師匠の帰りを待つ

ていましたよ。八五郎さんもよく御存じで——」

又次郎は少しおどおどしておりますが、大して悪びれた色もありません。

「又次郎さんの言うのは違いありませんよ、親分、ざんぐり 碁を打つていたんで」

「中座しなかつたかい」

「ちよいと、たばこ 煙草を買いに行きましたが——」

言いかけて又次郎は口を緘つぐみました。馬道からここまでは一走りです。煙草を買うことにして、人一人殺しに來られないはずはありません。

「煙草入は？」

「……………」

黙つて平次に渡した煙草入を開けると印伝いんでんの呟かますには一パイ新しい刻みが詰つてあります。

平次はそれを又次郎に返すと、もう一人染物屋の勘次というのに会いました。これは又次郎よりは少し若く、夕方からガラッ八の相手をして、馬道から一步も出なかつたことが判りました。

「さア行こうか、八」

平次はそこを切り上げて、山谷さんやの方へ向いました。

「又次郎が怪しくはありませんか、親分」

それを追っかけて囁くささや八五郎。

「何とも言えない。が、万事はお寿に逢つてからの事だ。——そ

れとも、又次郎はお政を怨んでもいたのか」

「そんな事はありませんが、お政が近頃旦那の山口屋の機嫌を取りすぎるんで、又次郎も面白くない様子でしたよ。もつとも、山口屋も浮気で、お政に飽きて、山谷のお寿のところへ繁々しげしげ行くようになったそうですから、お政にしてみれば、冷飯食いの又次郎の機嫌などを取っちゃいられなかったでしょう」

ガラツ八の話を聞きながら、平次は何やら深々と考えております。

五

番所へ行つてみると、三輪の万七とお神楽かぐらの清吉せいきちが、お寿の責めに大童おおわらわでした。

「おや、銭形の、たいそう耳が早いんだね」

万七は顔を上げて、皮肉と敵意とをこね混ぜたような、薄笑いを浮べました。

「お政は八五郎の師匠だそうでね、放つてもおけないから覗いただけさ。ところで下手人の当りは？」

平次は穏やかにこう言うのです。

「この女さ、間違いつこはねえ、が——旦那が見えるまでに、口を開けさせなきや後が面倒だ」

万七はそう言いながら、板敷の上に崩折くずおれた、小唄お寿の痛々

しい姿を指さしました。

まだ二十五六、お政よりは六つ七つ若いでしょう。一寸見はちよつとみ二十二三がせいぜい、色白で、華奢きやしやで、なよなよとした陰影の多い美しさは、豊満で肉感的で、少し媚態びたいをさえ持ったお政とは、およそ正反対な感じのする女でした。

羅物うすものを涼しく着て、板敷にもろて双手を突いた姿、縮れた赤い毛をたつた一つ難にして、このまま、中条ちゆうじようひめ姫や、照手てるてひめ姫の絵巻物の中に納められそうな姿です。

「お寿が下手人？ 一応俺もそう思ったが、腑ふに落ちないこともあるよ、三輪の」

平次は下手に出ました。

「お政の死骸の手に、縮れつ毛が握つてあつたはずだ。五六本のうち、三本だけは検屍の御役人にお目にかけるつもりで残しておいたが、錢形の兄哥あにいがあれを見落すはずはあるめえ」

万七は顧みてお神樂の清吉とうなずき合います。

「これかい、三輪の」

平次は素直に懷紙に包んだ毛を出しました。

「その毛に気が付きや文句はあるめえ。それにお政は、清松の大さらいで水銀みずかねを吞まされ損なつたことも、涼み船から突き落されたことも、錢形の兄哥は聞いているはずだ」

「……………」

「お政の喉のどの傷は薄刃の刃物で斬られたに違ちがえねえ。たぶん剃刀

だろう。剃刀なら女でもあれくらいのことが出来るぜ。——清吉をやつて、お寿の家中を捜させたが、今朝妹のお文ふみが使つたという、一番よく切れる剃刀がなくなっているぜ、——たぶんお寿がお政を送つて行く時持出し、新鳥越の路地で使つて、血だらけになつたのをどこかへ捨てたんだろう——その剃刀さえ見付かれば、口書きくちが拇印ぼいんがなくなつて、処刑台おしおきだいに上げられる女だ」

万七の言うのは、常識的で無理のない推理でした。

「その剃刀は多分これだろう」

平次は何の蟠わだかまりもなく、血染の剃刀を出しました。

「あッ、どこで、それを」

「現場近くひさしの底ほうの上に投り上げてあつたよ」

「そうか、下ばかり搜していたが——」

万七は忌々いまいましそうに舌打ちをします。

「お寿、——この剃刀に見覚えがあるだろう。正直に言ってくれ」と平次。

「……………」

一と目、お寿はサツと顔色を変えました。血に染んで斑々はんはんとしてはありますが、柄に巻いた簾とうや、使い込んだ刃の減りに、見違えようはなかったのです。

「どうだ」

「ハ、ハイ、——どうしてそんな所へ行つたんでしよう」

「お寿の品に相違あるまいな」

「ハイ」

これはお寿にとつては罪の白状も同じことでした。それを聞く万七はもう袖の中の捕縄を爪^{まさぐ}搜つております。

「銭形の、お蔭でこの女の口を開けさせたよ。剃刀が出さえすれば、こつちのものだ」

「待ってくれ、三輪の兄^{くせもの}哥、——お寿の家から剃刀を盗み出せる曲^{ひきだし}者なら、鏡台の抽斗^{くすかご}か屑籠から抜け毛を持出すのは何でもないぜ」

「何だと、銭形の」

万七は仰天しました。平次の言葉があまりにも変つていたので
す。

「三輪の兄哥、——氣が付かないはずはないが、この毛はみんな古い抜け毛だと思うが——」

「えッ」

「根のある毛が一本もないし、両端が細くなつて枯れているところを見ると、切れた毛やむし筆り取つた毛でもない」

「下手人はお寿の家から抜け毛と剃刀を盗み出し、お政を殺してからわざとつか掴ませたというのかい」

と万七。

「それでも考えなければなるまいよ」

「ところが、今日は稽古が休みだ。お寿の家へ行つた者は一人もありませんぜ」

お神樂の清吉は口を出しました。

「本当か、お寿」

と平次。

「……………」

お寿は悲しくもうなずきます。

「朝まで確かにあつた剃刀が、誰も怪しい者の行かないお寿の家から飛出して、血染になつて、新鳥越の路地の^{ひさし}庇の上に――梯子^{はしご}を掛けなきや届かないところに^{ほう}投げ上げてあつたのはどういふわけでしょう、銭形の親分」

清吉の調子は存分に皮肉です。

「だが清吉兄哥、お政の傷は前から斬つたものじゃねえ。お寿の

ような華奢な女に剃刀で前から切られるのを待っているお政でもなかりうし、第一あんなに前から切っちゃ、返り血を浴びて大変だ」

「……………」

平次は板敷に崩折れたままのお寿の清らかにさえ見える姿を見やりました。どこを捜しても、血の痕あとなどはありません。

「後ろへ廻つて、右逆手さかてで切ると、あんな具合になるが、後ろから斬られながら、お政の手はどう伸びて下手人の髪を掴むんだ」

平次は仕方しかたばなしになりました。なるほど、後ろから逆手に持つ

た剃刀で喉を切られながら、相手の髪を掴めようはありません。

「なるほど、こいつはむつかしい」

ガラツ八もやってみました、どうもうまくは行きそうもないのです。

「だいぶ面白そうだな」

そこへ顔を出したのは、見廻り同心の南沢鉄之進みなみさわてつしんでした。

「旦那、ちょうどいいところへ」

平次と万七は迎え入れて、今までの経過を細々こまごまと説明します。

「なるほど、どっちにも理窟はある。が、こう証拠が揃つちや、お寿を許すわけにも行くまい。ともかく、南の御役所へ伴つれて行って、平次にはもう一と働きして貰うことだ」

南沢鉄之進はそう言いながら清吉を顧みました。お寿に縄を打てというのでしょうか。

六

平次はその足ですぐお寿の家へ行きました。妹のお文ふみと内弟子が三人、下女が一人、更ふける夜を寝もやらず、不安と疑懼ぎくとに顫ふるえていたのです。

「錢形の親分さん、どうぞ、お願い、——姉を助けて下さい、人なんか殺せるような姉じゃございません」

飛んで出たのは、妹のお文でしょう。丸々と肥ふとった十八九の娘、姉のお寿とは違って、激情的で一本調子で、その代り少しお転婆です。

「それはよく解っているよ。助けようと思えばこそやって来たんだ、——隠さずに教えてくれ。第一番に訊きたいのは、今日は本当に誰も来なかったのか」

と平次。

「お稽古の休みは、なるべく人に来て貰わないようにしています。姉はあの通り、身体も心持も弱い人で、時々は一日のんびりと休まなきゃなりません」

とお文。

「お政が来たはずじゃないか」

「でも、それは勘定に入らないでしょう。殺された人ですもの」

「なるほど、そう言えばその通りだ」

平次は苦笑しました。その謎めいた言葉の真意は誰にも解りません。

「剃^{かみそり}刀が今朝まで鏡台にあつた——とお神楽の親分に申上げたのは、ありや間違いですよ。この二三日、誰も使つた者がありません。今朝私が使つたのは、無くなった方のだと思つたのは間違いで、新しい簾^{とう}も何にも巻かない剃刀の方でしたよ、親分さん」

お文は一生懸命でした。姉思^いらしい一途^{いちず}さは、涙ぐんだ眼、わななく唇にも溢れます。

「それがいけないよ、——そんな拵^{こしら}え事を言うから、お寿が疑われるんだ。物事はありのままに言うに限る。無くなった剃刀が今朝まで使つていた品なら、それでいいじゃないか。下手人はどう

せ巧みに巧んだ仕事だ。皆んなの思いも寄らない事をしていないに違いない」

「……………」

噛んで含めるような平次の言葉に、かりそめの拵え事を言ったのを愧^はじて、お文は丸い顎^{あご}を襟^{えり}に埋めました。

「ところで、お政は帰る時、髪乱れか、化粧崩れを直したはずだが——」

「え、その鏡台でしばらく顔を直していました」

「ギヤマンの懐^{ふところ}中鏡^{かがみ}があつたはずだが、見せてくれないか」

「鏡台の抽斗^{ひきだし}にありますよ」

「……………」

平次は桐の枠に入れた小さいギヤマンの懐中鏡を取上げました。枠にも鏡にも何の変りもなく、裏を開けて見ると、水銀は少しこぼれておりますが、わざと取ったというほどではありません。いや搔き取ったにしてもほんの少しばかりだったのでしょう。

「近頃山口屋の主人が来るそうだが、お寿の世話でもするつもりだったのかい」

「さア——」

お文はさすがに言い洩りました。蔵くらまえ前の大通だいっつうと姉の情事を岡っ引の耳へなど入れたくなかったのでしょう。

「正直に言う約束じゃないか」

「それは、いろいろおっしゃって下さるそうです」

「泊って行くような事は？」

「そんな事はございません。お酒を召上がると、いい御機嫌でお歸りになります」

「それからもう一つ訊くが、今日お政がやって来たのは、何か差迫つての事であつたのか」

「大さらいの相談のようでした」

「来ると、いつでも、あんなにゆつくり居るのかい」

「いえ、三年に一度もいらつしやいません。珍しい事で、姉も大変喜んでゐる様子でした。近頃二人の仲が、何となく面白くなかつたものですから——」

言いかけてお文はつと口を緘つぐみました。言つてはならぬ事に触

れたと思ったのでしよう。

「有難う、あまり心配しない方がいいだろう」

平次はどっちともつかぬ事を言つて、夜更けの街を、神田へ歸つて来ました。

七

「親分、いろいろの事が解りましたよ」

ガラツ八が神田の平次の家へ飛込んで来たのは翌^{あく}朝でした。

「鏡の事から先に話してくれ」

平次はガラツ八の饒^{おしやべり}舌を整理するように、こう切り出しま

す。

「お政の懷中鏡は、水銀みずかねがピカピカ付いていますよ、鵜うの毛ほどの傷もないくらいで、——七八年前に二両二分で買ったそうだが、物持ちのいい女じゃありませんか」

「それから、浜名屋の又次郎はどうした」

「師匠に死なれて悄氣しよげかえ返っていますよ。首ぐらい縊くり兼ねない様子で」

「嘘だろう、あんなに浮気な女どもに騒がれる男は、薄情なところがあつて、容易に死ねないものだ」

「へエ」

「お前などは捨てられると死ぬ方さ、ね、八」

「そんな心持になつてみたいね、親分」

「無駄は止^よして、山口屋は顔を見せないか」

「金持は薄情ですネ、七里^{しちりけつぱい}潔灰（結^{けつかい}界）で」

「涼み船でお政を助けた船頭が解つたか」

「こいつは大手柄でしたよ。朝つから飛廻^{ようや}つて漸く突き止めまし

た。浜町の大野屋の船頭で、喜七^{きしち}という——」

「あの晩通り合せてお政を助けたのか」

「それが不思議なんで、客が一人で船を出させて山口屋の船から離れないように漕^こがせていたそうですよ——こんな晩は水に落ちる人があるかも知れないから氣を付けてくれ、——と言つたそう
で」

ガラツ八の話は怪奇にさえなります。

「その客は誰だ、解っているだろう？」

「それが解らないんで、暑いのにほおかむ頬冠りを取らなかつたと言いますよ。それに、お政を水から救い上げると、すぐ姿を隠してしまつたそうで」

「フーム」

平次は唸うなりました。容易ならぬ企たくらみが匂います。

「船頭はいつでも来てくれる事になっていきますよ」

「それじゃ気の毒だが馬道へ伴つれて行つて、お葬とむらい式の支度で集まつている人間の首実検をさしてくれ。その中から頬冠りで船を雇つた人間が見付かりや、占めたものだ」

「そんな事ならわけはありません、親分は？」

「横山町の唐とうぶつ物問屋を探して、オランダ物の直しをする家を見

付けて来るよ」

平次の言うことは、まだガラツ八には謎でしたが、山が見えたことだけは確かのようにです。

その日の夕刻、平次は馬道のお政の家へ行きました。

「何を言やがる。つい先月、この船頭を頼んで、涼み船から落されたお政を救い上げたのは又次郎だ。去年の暮に、水銀を湯呑の中から見付けたのも又次郎さ、——昨夜ゆうべ煙草を買いに出たついでに、何をしたか解つたものじゃねえ、一応調べるに不思議があるものか」

漏れて来るのは、ガラツ八の大啖おおたんか呵かです。

「八兄哥、大層大きな口をきくが、こいつは又次郎の知ったこつちやないよ。又次郎は二度もお政を助けたただけだ、お政殺しにか関係かわりがあるものか」

そう言うのは三輪の万七の子分のお神樂の清吉でしょう。

「関係のないのはお寿も同じことだ。とにかく俺は又次郎をしよつ引いて、訊いてみたいことがある。縄張話は後で付けようじゃないか」

ガラツ八は突っ張りました。

「八兄哥、お寿はもう白状しているんだぜ。この上、変なことをするのは無駄骨折だ。銭形の兄哥にもそう言ってくんな。小唄の

師匠同士、芸の上の嫉^{ねた}みから、お政を殺したに相違ありません、と、ツイ先刻申上げてしまった。お寿の外に下手人などがあるわけはねえ」

これは三輪の万七でした。

「……………」

八

「御免よ」

その争いの真ん中へ、錢形平次は入って行きました。

「あ、親分、頼冠りの客は又次郎ですよ」

ガラツ八は部屋の隅に小さくなっている浜名屋の又次郎を指しました。

「銭形の、——俺は喧嘩を売りに来たわけじゃねえ、八兄哥が政の葬式とむらいの支度の最中へ飛込んで、又次郎を縛るの、山口屋が下手人だろうのと、無法な事を言うからツイ縄張話を持出したまでの事だ。悪く思ってくれちゃ困るぜ」

三輪の万七は静かですが、皮肉な調子でした。

「有難う、三輪の、八の野郎が何か夢でも見たんだろう。又次郎にも手落はあるが、下手人じゃない。山口屋などは最初から何のかわり関係もなかったのさ」

「それ、見るがいい、八兄哥」

清吉は平次の言葉に勢いがよくなりました。

「だが、お寿にも罪はないぜ、お神楽の」

「えッ」

「下手人は思いもよらぬ人間さ。いや幽霊と言った方がいいかも知れない——可哀想にお寿は何にも知らねえ」

「そんなはずがあるものか。人の仕事にケチを付けるんじやあるまいな」

三輪の万七は顔色を変えました。

「最初から筋を立てて話してみよう。違ったところがあったら、そう言ってくれ」

平次は静かに話し始めます。

「よし、聞こう」

一座は固唾^{かたず}を呑みました。夕づく陽は縁側に這^はつて、棺の前の灯^{あかし}が次第に明るくなると、生^{なまぬる}温い風がサツと吹いて過ぎます。

「お政は近頃年を取つて、芸も容^{きりよう}貌もだんだんいけなくなつてきた。人気はみんな、若くて綺麗なお寿に集まるし、大事な旦那の山口屋まで、お寿の方へ入り浸つてお政には切れ話を持ちかけている——。

お政は口惜^{くや}しかった。居ても立つてもたまらないほどお寿が憎かった、——お寿を一と思いに殺せば何でもないが、それでは世間の人がお寿が可哀想だと言うだろうし、殺したお政は、世間の憎しみを受けて、処^{おしおきだい}刑台に登らなければならぬ。人気稼業の

お政、世間からチャホヤされて来たお政には、それでは我慢が出来ない。死んでも人気は落したくなかった。——いろいろ考えた末、第一番に、お寿に水銀を吞まされ損なつたと世間に言いふらそうと思ひ付いた。自分のギヤマンの懷中鏡の水銀を剥がして、清松の大さらいの時、わざと又次郎に見付けさせるようにした——。

その証拠は、お寿の懷中鏡の水銀は傷^{いた}んでいるが、わざと剥がした跡はない。お政の鏡の水銀はあんまり無傷で新しい。ギヤマン鏡の水銀は、とても五年と保^もたないものだ。不思議に思つて、江戸でたつた一軒の、和^{オランダもの}蘭物を修繕^{なお}す家で訊くと、近頃ギヤマンの懷中鏡の水銀を貼り替えたのは、お寿じゃなくてお政だつた」

一座の人々は、線香臭い中に、黙って顔を見合せました。恐ろしい沈黙の中を、平次の声だけが、低いながら凜々りんりんと響きます。「涼み船から落ちたのも、お政の狂言だ。この時は一人ではどうにもならないので、浜名屋の又次郎にそれとなく頼んで、引揚げて貰った。——ずいぶん命がけの仕事だが、女が思い詰めると、それくらいのことは何でもない——。

お寿はだんだん世間から疑われて来た。が、まだ仕上げが出来なかった。そこで八五郎を手なずけて、沢山の証拠を見せ、お寿を疑わせるように仕向けさせた。が、——俺が一二日のうちに行く——と聞くと、その謀計たくらみがばれるのが怖さに、あわてて、取って置きの仕事に取りかかった——。

昨日^{きのう}お寿を訪ねて、顔を直す振りをして、剃刀とお寿の抜け毛

を盗み出し、お寿へ無理にせがんで、途中まで送つて貰つた。時刻を測つて、暗くなるのを見越しての仕事だ。お寿と別れると、新鳥越の予て^{かね}見定めておいた路地へ入つて、左手にお寿の抜け毛を掴み、右手に持った剃刀で、自分の左の喉をほんの少し掻き切つた。——いや、ほんの少し掻き切るつもりだったが、手元が狂つたのと、小唄の師匠で、咽喉^{のどぶえ}笛を避けたのがかえつて悪かつた。思わず手が滑つて、深く切つたのが、あの通り急所だ」

お政は咽喉笛を避けて切つたために、自分の頸^{けい}動脈^{どうみやく}を切つてしまつたのでした。

「剃刀を底^{ひさし}へ^{ほう}投げ上げたのは誰だ」

三輪の万七は最後の切札を叩き付けました。

「自分の喉を切つて、すぐお政が投り出した。最初から刃物を捨てるのが大事な仕事のひとつと覚悟していたので、深傷ふかでにも拘わらず、思わず力が入って庇の上へ投り上げてしまった、最後の一念というものだろう」

誰ももう、何にも言う者はありません。

「仏の前で言うのも何かの功德くどくだろう。お政は掻き傷こしらを拵えてお寿を縛らせ、一ぺんに人氣を落してやりさえすればよかったが、手が滑つて死んだのも自業自得だ。——今じゃあの世で後悔しているだろう。仏に代つて、俺が懺悔ざんげしてやる。みんなお政の心得違いからだ、——この殺しには誰も罪はない」

平次はそう言い切ると、棺の前に膝を突いて、香を捻ひねりながら黙もく禱とうを捧げました。

誰も物を言いません。涼しすぎる夕風が、お政の遺骸の前に灯ともつた蠟燭ろうそくを、生命いのちあるもののごとく揺るがします。

青空文庫情報

底本：「銭形平次捕物控（六）結納の行方」嶋中文庫、嶋中書店
22004（平成16）年10月20日第1刷発行

底本の親本：「銭形平次捕物百話 第五卷」中央公論社
1939（昭和14）年3月15日発行

初出：「オール讀物」文藝春秋社

1936（昭和11）年7月号

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：結城宏

2017年8月25日作成

2019年11月23日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

銭形平次捕物控

小唄お政

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 野村胡堂

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>